

石造美術オタクの

ひとり言

④ 板碑



高橋晋也／庵治産地の石材加工メーカーである(有)翼石材企画室に籍を置き、平成21年より、究極のこだわり製品として『世伝石塔』シリーズを開発、総合プロデューサーとして庵治・牟礼産地の優れた加工技術を持つ『庵治石工衆』によって制作している。中世の石造物をこよなく愛し、今年4月からは、中世の石塔を中心に勉強をする会、『翼塾』を開講。

こんにちは、(有)翼石材・企画室の高橋です。今回は「板碑」についてお話（ひとり言）をさせていただきます。

板碑と言え、青石（緑泥片岩製）で頭部を山形に加工された板状の石塔を想像されると思いますが、全国には材質や形状に地方色がある魅力的な板碑がたくさん点在しています。ちなみに頭部を山形に加工し、その下に2段の切り込みが入った板碑を「整形板碑」、これらの条件を欠く板碑を「自然石板碑」と2種類に大別されています。私は関西方面で、材質が花崗岩製の整形板

碑や自然石板碑、舟形板碑は五輪塔や宝塔などとともに平安時代には出現しているということになります。

また、在銘最古の整形

在銘最古の板碑は、平安時代後期治暦三年（1067年）福島県郡山市の阿邪訶根神社釈迦曼荼羅碑ですが、追刻の疑いがもたれています。ただ、福岡県在銘最古の観音堂曼荼羅自然石塔婆（板碑）には平安時代後期延久二年（1070年）の紀年銘がありますので、板

板碑は、鎌倉時代中期嘉禄三年（1227年）の埼玉県熊谷市江南文化財センター（以前は、埼玉県熊谷市須賀広の大沼公園弁天島にある小堂の傍に立っていました。）に展示されている須賀広阿弥陀三尊図像板碑です。さらに、こちらは鎌倉時代中期寛喜二年

板碑は塔身（主要位置）に題目や名号、種子、像容、塔形などを配し、主尊を供養することを目的として造塔されます。この造塔

供養によって得られる功德を死者に廻向し、造立者自身も現世利益（神仏の恩恵や信仰の功德が、現世における願望の実現として達成されること）にあずかることができま

す。これは五

輪塔や宝塔、宝篋印塔の仏塔思想、本質と全く同一と言えます。

違いをあえて言えば、

五輪塔や宝塔は大日如來の三昧耶形（シンボル）、宝篋印塔も法舍利（經典）を納めることによって仏の功德聚そのものである

り、塔形自体に意味があります。これに対して板

碑は、塔形よりも造立者が塔身に主尊を安置供養することに意味があります。また、五輪塔や宝塔、宝篋印塔などの塔形は4

方から礼拝できる立体形に對して、板碑の場合は正面のみの平面形になっています。そのため、他の石塔より加工を容易にし、鎌倉時代から室町時代にかけて供養塔や逆修塔として全国に普及して

いきます。

もちろん死者を埋葬し、追善供養をするために造塔されたお墓の例もあります。そしてここで最も重要なことは、お墓として造塔された板碑は、『主尊を安置供養することによって得られる功德に

よって、死者も生者も幸せと利益が約束される』という確固たる仏塔思想・本質があります。

しかし、江戸時代以降は、今まで板碑のシンボルであった種子などが小さくなったり、あるいは省略されたりします。そして、その代わりに板碑の中心部には戒名が彫られるようになり、主尊を供養する仏塔としての板碑は墓標・墓碑へと変化をしていきます。このことから、中世の板碑と江

戸時代以降の板碑（墓標・墓碑）とは、区別して考えなければいけません。また、仏塔としての五輪塔や宝塔、宝篋印塔にも、江戸時代以降は板碑と同様に墓標・墓碑へと変化をしていく傾向が見られます。

「でも、故人の戒名や家名を彫刻して供養するのだから何が違うの？」と言われれば、その通りで間違いではありません。造立者側が故人の冥福を祈るため、戒名や家名を彫刻して供養することとは、ごく自然の流れだ

と思います。

前回もお伝えしましたが、時代の流れとともに、お墓の形も変化し続けることは当たり前のことであり、形の変化に正否はありません。ただ、いつも私がお墓作りに対して危惧することは、ルールのようなものがないということです。いくら時代の流れとともに変化するといっても、何でもありということではないと思います。「あなたの思いを形に」などと奇抜な形のデザイン墓を作り、さらに「墓石に刻む文字は自由」ということで、何でも彫刻して良いのでしょ

うか？もちろん正否なんてありませんが、そこまでいくと仏塔思想・本質というルールは欠如してしまっているのではないかと思います。

改めて、今一度、日本人のお墓の本質を見つめ直していくときではないでしょうか。石造美術オタクのひとり言でした。

日本人のお墓の本質を学ぶ『翼塾』

第2回翼塾を庵治産地で開催

弊紙連載「おしえてお墓の話 石造美術オタクのひとり言」でお馴染みの高橋晋也氏（44歳）を中心に設立された『翼塾』では去る8月28・29日の二日間、香川県・庵治産地において第2回翼塾を開催した。

今回も東北、関東中部、関西、四国、九州などから計14名が参加。初日は故小島宏氏氏が月刊石材に連載した『日本人にとってのお墓とは何か』を参加者からのお墓についての質問に福原氏が答える質疑応答という試みを開催。その後、庵治石の採掘場（中谷商事（株）工場）を見学。夜の懇親会では、参加者同士で様々な意見・情報交換がなされていた。

翌日の午前中は仏教墓塔研究会・会長の福原堂礎氏が講演。午後からは参加者からのお墓についての質問に福原氏が答える質疑応答が行なわれた。4時間

にわたって様々な質問に即座に答える福原氏の知識と経験の深さには、参加者も熱心に耳を傾けており、高い満足度が感じられた企画となっていた。



『日本人にとってのお墓とは何か』を熱心に読み解く参加者の方々



神光寺阿弥陀三尊図像板碑（徳島県）

今回ご紹介する板碑は徳島県徳島市にある鎌倉時代後期の造立と考えられている神光寺阿弥陀三尊図像板碑です。形状は2段の切り込みがない頭部を山形にしただけの簡単な作りで、三区

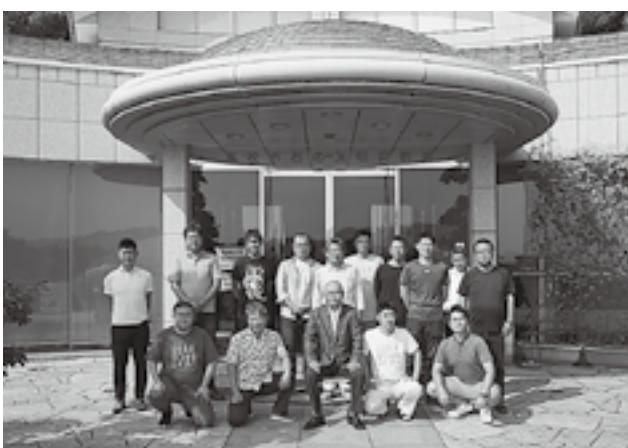
区内格狭間入りの台座を作り、その上に蓮座上に立つ阿弥陀三尊と、光背には火焰文と小蓮座に坐る化仏七体を現しています。非常に細密な図像で阿波板碑ではめずらしい善光寺式阿弥陀三尊です。高さ199cmで石材は緑泥片岩製です。

今回ご紹介する板碑は徳島県徳島市にある鎌倉時代後期の造立と考えられている神光寺阿弥陀三尊図像板碑です。形状は2段の切り込みがない頭部を山形にしただけの簡単な作りで、三区

区内格狭間入りの台座を作り、その上に蓮座上に立つ阿弥陀三尊と、光背には火焰文と小蓮座に坐る化仏七体を現しています。非常に細密な図像で阿波板碑ではめずらしい善光寺式阿弥陀三尊です。高さ199cmで石材は緑泥片岩製です。

今回ご紹介する板碑は徳島県徳島市にある鎌倉時代後期の造立と考えられている神光寺阿弥陀三尊図像板碑です。形状は2段の切り込みがない頭部を山形にしただけの簡単な作りで、三区

区内格狭間入りの台座を作り、その上に蓮座上に立つ阿弥陀三尊と、光背には火焰文と小蓮座に坐る化仏七体を現しています。非常に細密な図像で阿波板碑ではめずらしい善光寺式阿弥陀三尊です。高さ199cmで石材は緑泥片岩製です。



福原堂礎氏と一緒に記念撮影